

岐阜農業最前線

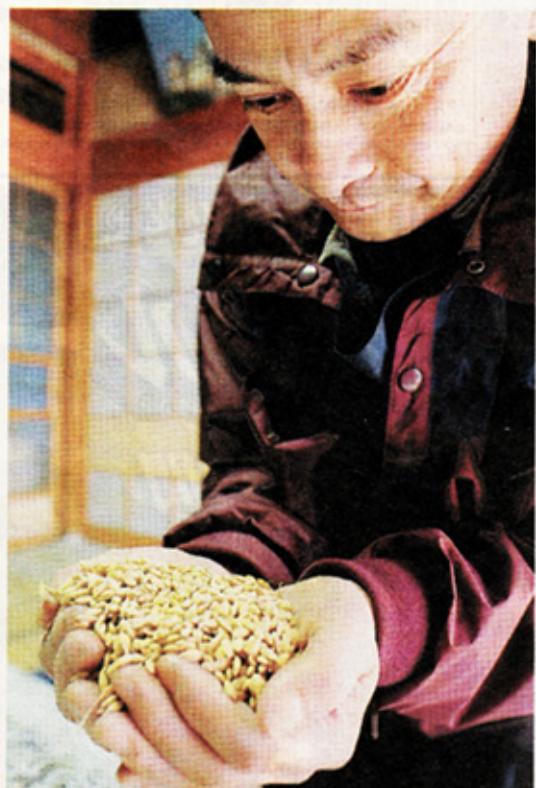
金色に輝き出したコシヒカリの棚田を見回っていた時だった。下呂市萩原町宮田。今井隆さん(50)は、自分の田で、周りの稲より背が高く、もみも大きい2株を見つけた。00年、収穫を間近に控えた9月だった。

「突然変異の米かな」今井さんは翌年、その2株からどうった種もみの苗を、コシヒカリとは別に植えた。秋、収穫した米を炊いて食べて驚いた。コシヒカリなどより粘りが強く、甘い。

今井さんは、新しい品種だと確信。米作りと表裏一体の関係にある水の神「龍」と、「新しい米として大きく輝いてほしい」との願いを込め、「龍の瞳」と名付けた。

公務員として県内を転勤して歩く今井さんは、9年前に居を故郷の旧萩原町に移した。現在は美濃加茂市に単身赴任中。農

②突然変異の米



02年に収穫された「龍の瞳」の種もみ。
今井さんの夢がぎっしり詰まっている
下呂市萩原町宮田の今井さん宅で

「龍の瞳」から広がる夢

繁殖には、週末の時間の半分以上を田畑で過ごす生活を続けている。02年には、龍の瞳の作付面積を一気に2倍に増やした。03年4月には農林水産省に新品种として登録を出願。04年からは栽培を龍の瞳だけに絞り、作付面積も一気に24㌶に。

「品種登録されれば栽培や販売で行政の協力も得やすくなり、多くの人にPRできる」と今井さんは意気込む。

市内の5軒のホテルや旅館が龍の瞳を使うようになった。米は

県によると、龍の瞳のようない、一定の地域での独自の栽培

によると、龍の瞳は茎が太くて固いため、風に強く、育てやすい。いも病にかかりやすい「体质」の克服が課題だとう。

基本的に1㍑900円。通信販売をしているほか、市内の数軒の小売店にも卸し、市販している。品種はコシヒカリやハツシモだが、アイガモに除草をさせる「あいがも米」、米の甘みを増すために甘味料の元となるステビアのエキスを散布して育てる「蜜風船」など、様々な方法で消費者に安心や安全性をアピールし、ほかの地域の米との差別化を図る。

県や全農県本部も、従来の米に加え、こうした方法で栽培された米についても、物産展で紹介するなどして売り込みに力を入れる。

県農産開拓課の雨宮功治技術課長補佐は「独自の農法で栽培し、販路が広がっている米に対しては、できるだけ協力していかたい。龍の瞳も『これから生産が広がる可能性がある』と話す。」

近年、米価は全国的に長期低迷傾向にあり、中山間地域を中心農家が耕作を放棄してしまった田が増えている。今井さんは、そうした問題を解消する起爆剤として、龍の瞳を生かせないかと考えている。

「米が売れれば、地域の農家も米作りをする気力がわいてくる。より多くの人が龍の瞳を作ることで、農村が元の活気あることを取り戻せるようにしたい」今井さんの夢は広がる。